

申 京淑著

父のところに行ってきた

父という個人の物語であつても、それが社会のなかで紡がれたのなら、

彼は歴史のなかで傷つき、悩み、苦しんだはずだ。しかし、それを子どもである自分は何も知らない。父の傷とはいったい何か。

この物語は、父について書くことによつて誰も知りえなかつた痛みの所在を探っていく。作中の言葉を借りれば、それは〈父の内面に抑え込まれたまま表現すること〉もならず、わだかまつて語られなかつたことと、父は、植民地支配から解

文学芸術



四六判・472頁・2640円 アストラハウス 978-4-908184-50-5 TEL. 03-5464-8738

放されたばかりの頃、村は、十九歳で母を嫁にもて流行した伝染病によつて両親を喪つた。以来、姉に寄り添われながらも自力で生き抜くことを余儀なくされた父は、やがて朝鮮戦争の喧騒に巻き込まれる。人民軍が村に攻め込んでくると、激しい戦いが繰り広げられた。そんななか、召集の

放されたばかりの頃、村は、十九歳で母を嫁にもて流行した伝染病によつて両親を喪つた。以来、姉に寄り添われながらも自力で生き抜くことを余儀なくされた父は、やがて朝鮮戦争の喧騒に巻き込まれる。人民軍が村に攻め込んでくると、激しい戦いが繰り広げられた。そんななか、召集の

誰も知りえなかつた痛みの所在を探る

語られなかつた父の歴史と、言葉にできない〈私〉の悲しみ

長瀬海

指令を受けた父は叔父の紙の束を見つけると、秘はからいで中指を切り落とされる。銃を持ってなくする。戦争を生き延びた父

のの。久しぶりに父に会つて抱いた、父は、いつかの風の音、いつかの戦争、いつかの飛んでいてしまった鳥、いつかの大雪、いつかの生きなれてはという意志、それらが集まつてどうにか一個の塊となつていて、その意味を、そのとき彼女が改めて知つただろう。歴史を生き抜きながらも、言葉を持たなかつたことを二人の内面に抑え込まれたまま表現することのできない苦しさを表出する。だけど、それはカタルシスを生むた消えていこうとしていた。語り手は、作者は、そんな人々にいま手を伸ばす。それは彼らを助けるためだけじゃなく、自分たちをも救済することになるから。僕はこの小説を父の物語と同時に、〈私〉の回復の記録としても読んだ。じつは〈私〉は娘を喪失した母でもある。娘が亡くなったのは六年前。本作の執筆が二〇二〇年であることを考えれば、それはセウォル号事

のの。久しぶりに父に会つて抱いた、父は、いつかの風の音、いつかの戦争、いつかの飛んでいてしまった鳥、いつかの大雪、いつかの生きなれてはという意志、それらが集まつてどうにか一個の塊となつていて、その意味を、そのとき彼女が改めて知つただろう。歴史を生き抜きながらも、言葉を持たなかつたことを二人の内面に抑え込まれたまま表現することのできない苦しさを表出する。だけど、それはカタルシスを生むた消えていこうとしていた。語り手は、作者は、そんな人々にいま手を伸ばす。それは彼らを助けるためだけじゃなく、自分たちをも救済することになるから。僕はこの小説を父の物語と同時に、〈私〉の回復の記録としても読んだ。じつは〈私〉は娘を喪失した母でもある。娘が亡くなったのは六年前。本作の執筆が二〇二〇年であることを考えれば、それはセウォル号事

★シン・ギョンスク 韓国の作家。李箱文学賞、現代文学賞、東仁文学賞など受賞。著書に『母を頼む』（マン・アシア文学賞）『離れ部屋』『月に聞かせたい話』など。一九六三年生。